

---

## 『東西南北2012』 発刊にあたって

『東西南北2012』をお届けします。

この書き出しは前号『東西南北2011』の編集後記の書き出しとまったく同じです。見てくれは、上田敏の訳詩集『海潮音』にいう「すべて世は事も無し」（ブラウニング「春の朝」）といった具合いなのです。その実、前号の編集作業の内幕を打ち明ければ、2011年3月11日という日付は、『東西南北2011』の編集作業がようやく完了し、当日の午前中に印刷を終え、製本工程に移ったばかりのところだったのです。あと一日でも半日でも作業が遅れていれば、前号の発刊はどうなっていたか、いま思い返してみても慄然とします。

お蔭で前号は、例年と同じようにみなさんのお手もとにとどこおりなく届けることができました。多くの人びとが帰宅難民という不測の事態に巻き込まれ、メルトダウンやマイクロシーベルトなどという耳慣れないことばが連日新聞やテレビを賑わわせ、スーパーやコンビニからは飲料水や食品が消え失せ、和光大学でも修了証書交付式はとりやめになりました。入学登録やオリエンテーションだけは辛うじてすませたものの、計画停電などのあおりを受けて、授業開始はゴールデンウィークまでずれ込まざるを得なかった一年前の苦難に満ちた日々を思い返すとき、『東西南北2012』をお届けします、というこの紋切り型のことばの背後にも、さまざまな事態やそれらに携わったものの思いが畳なわっていることを、今さらながらに思い返してみるのです。

この号も、どうか恙なくみなさんのお手元に届きますように……。

『東西南北2012』は、例年どおり、研究所主催のシンポジウムを巻頭に据え、4つの研究プロジェクトの論文計7本と、催しものうちから2本、さらにブックレビュー1本の原稿を得て、質・量ともにゆたかな内容を盛り込むことができました。これらの論考を通読していただくと、研究所主催のシンポジウム『建築文化の「いま」』や、催しもの「ティーチン 震災・脱原発を考える」はもちろんのこと、それ以外のものにも、上に述べた事態が陰に陽に影を落して、3・11東日本大震災とそれにともなった津波の惨害や、深刻さを増す原発事故、加速する少子高齢化問題、アジア諸国ばかりかわれわれ自身のくらしを襲う経済格差の拡大、それらの困難な事態に向き合わざるをえないストレスからくる心のやまいの増加、そうしたなかで次世代を担う子どもたちをいかに育むべき

---

かの模索等々、われわれが直面している喫緊の諸課題が顕著にその露頭を現しています。そればかりか、これら歴史的転換期の諸問題と正面から取り組み、格闘している所員の真摯な姿勢を読みとることができるようです。

現に、『建築文化の「いま」』は企業から講演者を迎え、さらには建築設計や地方自治体の現場でこの種の課題と格闘しているパネラーを加えて、産・学・官あげての省エネ・節電への方途を模索しようとしたものです。「ティーチン震災・脱原発を考える」は早く3月中から企画され、5月下旬から6月上旬にかけて、学内有志によって急遽開催された、深刻化を増す原発事故とそれによってもたらされる被害に、研究者・学生・市民の立場から〈いま〉〈ここ〉でどのように向き合ったらよいのかを考えようとしたものです。筆者自身もかかわっている「東京一市民のくらしと文化」は、もともとは20世紀の東京で生活を営んできた一市民のくらしと文化の足取りを考えようとしたものです。しかしながら、この一家は関東大震災と第二次世界大戦のふたつの災禍に遭遇しているばかりか、たび重なる天災や人災の下、官と民とが区画整理事業や財産税をめぐるせめぎあい、角逐するなかで、おのがじし生活の再建をめざしてゆくプロセスを辿らざるをえなかったことで、凶らずも3・11以後の現下の社会・経済・文化状況を照射するための恰好なインデックスになっています。

これらの三つの研究活動を覗くだけでも、「税と社会保障の一体改革」の美名のもとに推し進められている政府の施策をあげつらうまでもなく、官と民とのあいだに生じている軋轢、20km圏内／圏外といったおよそ学問的根拠のない線引きに象徴される官と学とのあいだに見られる認識の裂け目、産と学とのあいだに蜜月であるかのように幻視されている協同步調の欺瞞などを踏まえた上で、真の意味での産・学・官の協働的取り組みはいかにしたら可能か、という問いかけがおのずからに浮上してくるようです。こうしたことから、いささか自画自賛に似てしまいますが、研究所の活動は和光大学にふさわしい活動を果たし、成果を挙げているということができるといえるでしょう。

その一方で、上野の山から轟く殷々たる砲声に浮き足立つ塾生たちを尻目に、悠々と講義を続けた福沢諭吉の逸事（『福翁自伝』）を想起したりもしています。さらには、「紅旗征戎は吾事にあらず」とひそかに書き記した藤原定家の『明月記』の諦観もひとしお身に沁みるのです。一方で当面する諸課題にコミットしつつ、他方でそうした現前する課題からひとたび身を遠く引き剥がし、それらの因ってきたる要因に深く思いを潜めること——学問・研究の真のいとなみはそこにしかないからです。

ひるがえって、和光大学総合文化研究所の研究プロジェクトの編成のありよ

---

うやシンポジウムの内実を、ここ10年の歩みのなかに置き直してみると、つぎのような傾向があぶり出されてくるようです。掲げられた研究テーマのもとに複数の所員が集い、さまざまな関心やスタンスに基づいて同一の課題に取り組む——そのところはいささかも変わりはありません。しかしながら、かつての研究プロジェクトの組織のされかたには、学科や学部を横断する、さらには専門領域を異にする学外者をも巻き込んだひろやかな知の共同体を編成しようとするところざしが顕著に現れていましたし、またそれを主眼として研究所は組織されたのでした。

それに対して、現下の研究プロジェクトには、同一学科や同一コースの所員たちによって組織される傾きが色濃く出てきたように見受けられます。それはそれで、問題設定がきわやかになり、アプローチもまたシャープさを増すという利点のあることは言うまでもありません。そうではありますが、他方では、研究論文やシンポジウムにおける発言は、誤解をおそれずにいえば、饗宴からはほど遠い仲間内の情報として取り交わされている傾きがあるように見受けられます。所員相互の批判や検証を必ずしも十分には経ないままに、発信されているといっても同じことです。前号の後記でも、本誌の総合雑誌としての性格に触れ、限られた専門領域の読者に向けられる以上に、だれもが読みやすく、分かりやすい、それゆえにこそ鋭さを増すであろうメッセージに整えなおす必要のあることを要請しましたが、それはただに言説の領分にとどまることなく、当初の問題設定そのものにもはね返り、深くかかわるはずのものとして提言したのでした。

きわやかでシャープではあるけれども、狭く特化した課題設定といった傾向が現れてきたのには、学内諸会議や募集対策などの業務に多くの手を取られるといった、所員が置かれている研究環境が影響していることはもちろんです。それとは別に、各プロジェクトの年限が短く限られ、目に見えて役に立つ成果を「性急に」求められているので、超域的で遠大な課題（ことばを換えていえば、迂遠かつ悠長ともみえる課題）とじっくりと取り組むことを掣肘されてしまっている側面もまた、存在しているようです。

だからただちに現行制度の見直しを、という声を挙げるつもりはありません。それというのも、こうした研究動向は、ひとり和光大学総合文化研究所にとどまる問題ではないように見受けられるからです。独立法人化が推し進められている国公立大学でも、科研費交付の現場でもまた、こうした性急な成果主義が共通して認められるように思われるからです。それゆえにこそ、「実学」に対する「虚学」はいまや氣息奄々どころか、地を払ってしまっている現状に、待てよ、と呟いてみる必要はないかということです。

大学が「象牙の塔」だという言説は、いまや死語と化しているようです。そう

---

したいまだからこそ、あらためて産や官の要請してくる課題と鋭く対立し、それらをいったん捉え返し、それらの意図や方法を入念に点検し直す学のあるかたに思いを潜めなければならないようです。産・学・官あげての協働が、ある意味で無条件に是とされるきらいのある現在、そこによこたわる軋轢や裂け目にあらためて思いを潜めたいものです。

和光大学総合文化研究所所長 塩崎文雄